

季節を知ったら  
暮らしが楽しくなった

（第四六八号）

芒種ぼうしゅ

六月六日

## 特別神領民

六月。二十四節気は芒のぎのある穀物を蒔く時期という「芒種ぼうしゅ」を迎えます。芒とは、稲や麦などの実の外殻にある針状の突起をいいます。

芒種はや 人の肌さす山の草 鷹羽狩行

この時期になると、草々がみるみるうちに育ち、人の肌を刺すようになってくると詠んでいます。草木のたくましさに気づく季節でもあります。

伊勢のお木曳おきひきは、外宮へ曳き込む陸曳おかびきが今月十三日までです。陸曳では伊勢市内に結成された奉曳団ほうえいだんだけでなく、全国の崇敬者による「特別神領民しんりょうみん」の奉曳も金土日曜に行われています。背中に「伊勢」と大きく記された白い法被はっぴを着用して、宮町から外宮北御門きたみかどまでのおよそ一キロを曳いていきます。今回は、およそ二万人が参加する予定。奉曳車から伸びる二本の白綱に連なる人々は最初こそ静かでしたが、徐々にエンヤー、エンヤーと掛け声をあげ、なかにはこぶしを上げている人もいました。笑顔があふれる奉曳です。

この特別神領民の奉曳は、昭和四十八年の第六〇回式年遷宮の際に始まりました。神社界より地元に対して全国の神宮崇敬者にも参加できるようにという要望を受けてのことです。伊勢神宮との調整を行い、「一日神領民」制度を設け、伊勢市民以外にも門戸を開きました。その後、平成二十五年の第六十二回式年遷宮の「お白石持」行事から、「特別神領民」と改称されています。

全国からの特別神領民の奉曳を支えるのは、地元の伊勢市民の有志たち。朝のお迎えから、お木の荷締めにじめ、木遣り唄きぢや、そして奉曳後のおもてなしまで、有志が行うのです。そのうちの一人は、「ようこそ伊勢へお越し下さいましたと声を掛けたら、感動をこみ上げました」と、熱く語ってくれました。特別神領民の奉曳は崇敬者だけでなく、迎える伊勢の人々にも感動を与えていました。

文 千種清美



# おかげの里便り

## おかげ横丁

### ○ 木曾ヒノキの箸づくり体験

式年遷宮に関連するお木曳行事を記念し、伊勢神宮の御用材として用いられる木曾ヒノキや、長野県上松町に受け継がれる森林文化への理解を深めることを目的として、木工体験ワークショップを開催します。

上松町は、古くからご神木を伐採し、式年遷宮における御用材を供給してきた由緒ある地域であり、本企画では、その貴重な木曾ヒノキに実際に触れる機会を通じて、木と人とのつながりや日本の伝統文化の価値を体感していただきます。

日 時/令和8年6月20日(土)、21日(日) 10:00~17:00

場 所/おかげ横丁

お問い合わせ/おかげ横丁総合案内「おみやげや」電話0596-23-8838

## 五十鈴塾

### ○ 五十鈴塾だより 芒種に寄せて「黴」<sup>かび</sup>

梅雨時、うっかりしているとバスルームや台所、食品にもかびを発見して愕然とします。かびはキノコや酵母と同じ真菌類で糸状の菌糸が絡まった状態のものです。20度から30度が適温で湿度は60%以上、まさしく梅雨の頃。

嫌われもののかびですが、自然界では枯葉などの分解に役立ちます。かびが分泌する酵素はタンパク質をアミノ酸に分解し、でんぷんを糖質化し、脱水にも役立ち鱈節はかびを付けて脱水します。ブルーチーズは青かび、カマンベールは白かび、日本酒、焼酎、醤油、味噌はニホンコウジカビを基とした麹がなければなりません。

ペニシリンの元は青かび、かびのおかげでどれだけの人があつたことかと思うと一概に嫌ってはかわいそうと思いますが、やっぱり嫌いですね。

## 五十鈴茶屋

### ○ 五十鈴茶屋節気菓子

枇  
杷

枇杷の実が鮮やかに色をつける頃となりました。枇杷は果実の美味しさはもとより葉に薬効があり、古くから、病を癒すために用いられたと伝えられています。

黄身餡を外郎生地で包み、甘く瑞々しい枇杷の実を表現しました。

なつ  
夏

ごろも  
衣

六月は衣替えの月。

昔の人々もこの時季には、帷子(かたびら)という麻で織った薄い夏物へと衣替えをしていたといいます。薄紅と緑に染め分けた餡を、透明な葛生地で巻き、涼しく軽やかな夏衣の風情にみたまてました。

よひら  
四片の花

はな

四片の花とは、あじさいの別称。

四枚の花びらがたくさん集まった姿から、その名が生まれたと言われます。

薄紫の錦玉を淡雪で寄せ、白餡を包みました。